

BUZZ READING

READ AND



REPEATING

STORY METHOD

再考「音読活動」

先生方は、毎日の授業で音読をされますか？

その音読は、何を目的に、どのような見通しでされているのでしょうか？

この質問にドキッとされた先生方は、必読です。

本特集では、多くの先生方になじみの深い音読を取り上げ、その意義や目的を捉え直し、効果的な実践方法、音読手法の選び方、そして、授業プランへの組み込み方を再考していきます。

- 01 音読活動を再考する —「活用する力」を育成する観点から— 竹内 理
- 04 いま見直したい！4つの音読活動 竹内 理
- 06 音読を取り入れた授業モデル 津久井 貴之



音読活動を再考する

—「活用する力」を育成する観点から—

竹内 理 (関西大学)



音読活動の現状

2021年度より中学校で実施される新しい学習指導要領では、「英語を使って何ができるのか」という視点が大切にされている。つまり、知識・技能の習得だけにとどまらず、目的や場面・状況に応じて「英語を活用する力」を身につけるといった観点から、英語を学ぶことが奨励されているわけである。このような流れの中で、我々英語教師に馴染みの深い音読活動は、どのような変化が求められていくのだろうか。インタビューや会話、ディスカッションなどに比べて、やり取りや即興性など「活用」の要

素が少ない分、授業における音読の位置づけを大幅に変えていかねばならないのである。このような問題意識のもと、本稿では、「活用する力」を重視する英語教育における音読のあり方について、考えていくことにしたい。

まずは、学校現場における音読活動の現状を確認しよう。『中高の英語指導に関する実態調査』（ベネッセ教育総合研究所、2015）によると、中学校での音読の実施率は、「よく」（88.2%）と「時々」（9.9%）をあわせると実に98.1%にもものぼり、とて

もよく行われている活動となっている。この結果は、現場教員の実感とも合致するものと言えるであろう。しかし、どのような目的を持ち、どのような意義を認めて音読を実施しているのかと問われると、（あまり深く考えることなく）当然やるべきルーティーンとしての活動として実施している、との回答も多いのではないだろうか。これを裏付けるように、『中学校学習指導要領解説 外国語編』（2018）では、以下のように注意を促すに至っている。

音読の指導に当たっては、単なる練習としての音読にとどまることのないよう、指導者も学習者も、書かれた文章の本来の目的を確認した上で、そもそも音読することがふさわしいのか、ふさわしいとすればその音読はどのような目的で行われるのかを明確に意識することが重要である。さらに、学習の段階や言語活動の流れの中で、音読することの目的や意義を教師も生徒も意識する必要がある。(p.59)



音読の目的と意義

それでは、音読活動（与えられた題材を声に出して再生する活動）の目的や意義とは何であろうか。阿野（2010）によると、音読活動のバリエーションは26種類あり、鈴木・門田（2012）では実に38種類にものぼるといふ。しかし、その目的や意義となると比較的限られており、①音声面での習熟、②言語材料の記憶と内在化、③言語処理・技能の自動化と高速化、そして④学習者の動機づけとクラスの活性化の4つに集約することができよう。

上記①から③は、言語習得の認知的な側面と関係しており、知識・技能の効果的な習得を意図しているものと考えられる。つまり、生徒が音声面に習熟し、文を内在化して、それをすばやく使えるようになる、という目的で音読活動を行っていることになる。④は情動的な側面と関係しており、学習

者のやる気と参加意識を高める目的で音読活動を行っていることになる。

これら4つに加えて、新しい学習指導要領では、書かれた内容を表現するための活動としても音読は位置づけられており、内容にふさわしく音声化し、間（ポーズ）の取り方等を考えながら、相手に伝えることが強調されている（『中学校学習指導要領解説 外国語編』pp.58-59）。筆者は、これをコミュニケーション活動への橋渡しと呼び、「相手に内容を伝える」という表現の要素を持った5つ目の目的として付け加えたい。そうすることで、音読活動の目的は、単に音声面や技能面での熟達だけではなく、コミュニケーション活動の疑似体験まで拡張されていく。そして、これらの目的にあった様々な活動のバリエーションを段階的に利用することで、「活用する力」の育成にま

でつながる「(活動の)流れ」として、音読を位置づけ、使うことが可能となってくる。

このように考えると、音読は、漫然と導入するのではなく、前述のどの目的で、どのバリエーションを、授業のどこで、どのくらい利用するのか、という計画性を教員がしっかりと持つことが重要となってくる。また、何のためにその活動をやっているのかを、生徒に明確に伝えて、活動の目的を共有しておくことも大切だ。なぜならば、活動の目的が不明確な状態では、学習者側に見通しが立たず、工夫や改善の生じる余地が減り、その場限りの機械的練習における危険性が増すからである。目的に応じた音読バリエーションの選び方やそれぞれの特徴に関してはpp.4～5を参照されたい。



実質化の条件

認知的側面から

音読は、多くの中学校教員が利用している活動であると先に述べたが、そのやり方は実に多様である。たとえば、授業の初めにコーラス・リーディング（一斉に声を合わせて読む音読）を入れるだけであったり、（一連の流れを作らず）シャドーイングをさせるだけであったりと、効果的な利用がなされていない場合も多い。それではどうすれば、活動の実質化、つまり効果的利用へとつながっていくのであろうか。

まず考えられるのは、①内容理解の終わった既習のテキストを用いる、ということであろう。内容理解のために読むのであれば、黙読の方がかえって効率が良い。また、相手に伝えるという観点からみても、伝えるべき内容が定かでない状態での音読活動は不適切といわざるを得ない。次に、②音読モデルを何度も提示し、どこに注意して音読すべきか、を気づかせるよう指導しておくことも必要となる。特に、音声面での習熟や言語材料の内在化を目的とする音

読活動の場合、この点への配慮が不可欠となる。

さらに、③音読を単体の活動だけで終わらせず、目的と難易度を变化させた様々な活動を含む一連の「流れ」にして提示することも大切だ。たとえば、竹内（2007）は、この流れを「音読ストリーム」とよび、音声面での習熟から、言語材料の内在化、言語処理の自動化、言語操作の高速化、そして相手のある簡単なコミュニケーション体験に至るまで、段階を追って、様々な音読のバリエーションを通して学んでいくことを提案している。このように音読活動の「流れ」を意識することで、単調さを避けながら練習の回数を増やし、1つのテキストを余すところなく使い切ることも容易となる。さらに、事前に「流れ」を生徒に示すことで、学習の最終的な目的が「英語を使う」ことにつながると意識させながら、(ドリル的要素も多々含まれている)音読活動を続けていくことが可能となる。

もう1つ重要なポイントは、音読活動の途中に、④確認と修正のフェイズを入れることであろう。目的にそった活動ができているのか、正しく音読しているのか、などを確認する形成的評価（途中の評価によりパフォーマンスを向上させる手法）の段階を含んでおくことが重要となる。また、もし活動の目的がうまく達成できていないのであれば、修正のための指導と、その後に（改善確認のための）パフォーマンスを行うチャンスを与えていかねばならない。たしかに1クラスの生徒数が多い中学校においては、形成的評価の実施は難しい。しかし、チェックリスト等を使いながら生徒にペアで確認させたり、あるいは机間指導で教員が誤りをサンプリングをして、典型的なものを全体に対してフィードバックしたりと工夫を行うことで、確認と修正、さらには改善パフォーマンスの機会までを含んだサイクルを導入できる可能性は十分に存在している。

▶▶▶ 情意的側面から

音読活動の効果的実施には、実は認知面だけでなく、情意的要因も強く関係している。その1つが、いわゆる「音読不安」(たとえば、Iijima, 2005)と呼ばれるものである。人前で声を出して慣れない英語を読んだり、ペア音読で相手からダメだしをされたりすることに対して、不安を感じる学習者が少なからず存在している。この問題に対応するためには、英語学習の初期段階から音読活動を導入して習慣を作り出しておくことや、教師と生徒、生徒間でのラポー

ル(親和性)を形成することが大切だ。また、他の学習者と比べず、本人の過去のパフォーマンスと現在の状況を比較してその伸びを評価したり、良くできている側面を教員が取り出し、これをほめたりして、自己効力感(特定の活動に対しての「できる感」)を高めるよう、根気強く指導を続けていく必要もある。

その一方で、新奇性がなくなることで、活動に飽きてしまう学習者も多く存在している。この場合は、活動の種類を変え、単

調さを抑えるという対応がスタンダードな方法であろう。しかし、同一の活動であっても、たとえば、音読再生する単位を句から文へと切り替えたり、文でも1文単位から2文や3文単位にしたりと、認知負荷を調整しながら対応していくことも可能である。これは、負荷を高めることでチャレンジの要素を保ちつつも、一方で目的とやり方が明瞭にわかっているため不安がなく、その結果として、活動に没頭できる状態(これを「フロー」という)を作り出すことと関係している。



これからの音読活動

音読活動は、知識・技能の習熟のためだけに利用されたり、目的や意義が十分に認識されないまま、あたりまえのように生徒に課されたりする場合も見受けられる。しかし、「活用する力」の育成を重要視する時代の英語教育においては、このような状

態のまま音読を利用していきわけにはいかない。音読をする目的をよく理解し、その目的に適した活動を様々なバリエーションの中から選択し、徐々にコミュニケーション活動へと誘導していくよう配列して活用していくことが、私達には求められているのだ。

また、確認と修正のフェイズを含むサイクルの確立、不安の軽減、教室における親和性の醸成など、様々な配慮が音読の効果的実施には必要となってくる。このように、音読は、教師の高度な計画性を前提とする活動であることを、決して忘れてはならない。

「音読活動チェックリスト」

- テキストは音読にふさわしい内容のものか
- テキストは音読モデルが十分に提示され、意味理解も終わった既習のものか
- 使用する音読活動の目的を教師は意識しているか
- その目的を生徒と共有しているか
- コミュニケーション活動への橋渡しとなる「流れ」を作っているか
- 「確認と修正」のフェイズは含まれているか
- 認知的負荷は生徒にとって適切か
- 負荷が段階的に上がるようになっているか
- 活動の実施に不安がないか
- 活動が単調になっていないか

その音読、効果的？
自らの音読活動を
チェックしよう！



筆者紹介

竹内 理

・神戸市外国語大学大学院・米国モントレー国際大学院修了(フルブライト奨学生)。博士(学校教育学)。
・同志社女子大学助教授などを経て、現在、関西大学 外国語学部・大学院外国語教育学研究科教授(学部長・研究科長)。

参考文献 (p.01~05)

- 阿野幸一 (2010). 「文教大学わらしべ広報プランナー」研究室訪問記(<https://bunkyowara-exblog.jp/15037649/>)
- ベネッセ教育総合研究所 (2016). 『中高の英語指導に関する実態調査2015』(ダイジェスト版)
- Iijima, K. (2005). Factors associated with EFL oral reading anxiety. (修士論文: 関西大学大学院外国語教育学研究科)
- Katayama, K. (2012). Is repeating practice really inferior to shadowing practice? —An empirical attempt to demonstrate the effectiveness of repeating. (修士論文: 関西大学大学院外国語教育学研究科)
- 文部科学省 (2018). 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』 開隆堂
- 鈴木寿一・門田修平(編著) (2012). 『英語音読指導ハンドブック—フォニックスからシャドーイングまで』 大修館書店
- 竹内 理 (2007). 『達人の英語学習法—データが語る効果的な外国語習得法とは』 草思社

いま見直したい! 4つの音読活動



バズ・リーディング

Buzz reading

生徒が各自で、声に出してテキストを読む音読活動。個々人のペースで自由に読ませることもできれば、読む回数や活動時間を教員の側が決めることもできる。回数や時間の設定を生徒自身にまかせて、その目標達成に向けて練習させる指導法もある。

目的 音声面での習熟(音と文字の関係強化を含む), 言語材料の内在化

ポイント ▶ 音読モデルを生徒にしっかり提示する

バズ・リーディングで重要なのは、音読のモデルを事前に生徒へ提示しておくこと。この際に、習熟させたいテキストの箇所を簡潔に説明し、そこに生徒の注意を向けさせておくことも大切。たとえば、文末の抑揚、アクセントの位置、語頭の破裂音の強さ、ポーズの位置など、いくつかの重要なポイントに気づかせた上で活動に入ると習熟が進みやすい。また、モデルの提示は一度で終わらず、繰り返すことが肝要。なお、読む回数や活動時間などの目標をあまり強調しすぎると、その達成ばかりに注意が向き、本来の目的である音声面での習熟がおろそかになったりすることもあるので要注意。

ポイント ▶ 机間指導を十分に行う

教員はバズ・リーディング中に机間指導を十分に行う必要がある。口パクではなく声がきちんと出ているのか、ポイントとなる箇所がうまく音読できているのかななどを適宜チェック。問題点に気づいたら活動を一旦とめて、全体に対してもう一度指導する。また教員だけの指導では目が行き届かないこともあるので、生徒をペアにして、交互にバズ・リーディングをさせ、聞き手側の生徒にチェックをさせるのもおすすめ。この時、聞き手側に重要ポイントのチェックリストを持たせ、ポイントがクリアできているのか確認させるとよい。慣れてきた場合には、リード&ルックアップ形式の活動(p.5)に取り組みさせることも可能。



リピーティング

Repeating

教科書を閉じて、テキストが読めない状態で、ポーズごとに、聞こえてくる英文をそのまま再現していく活動。一度に再現する英語(文や句)の量を調整することで、さまざまな英語力の生徒に対応することが可能となる。また、同じテキストを使用して複数回の活動を行い、一度に再現する英語の量を少しずつ増やしていくような指導も可能。

目的 言語材料の内在化, 言語処理の自動化・高速化

ポイント ▶ まずはリピーティングを丁寧に、無理なシャドーイングは禁物

英語学習法に関する書籍などでは、英文が聞こえてくるとほぼ同時に、その内容の再現を開始するシャドーイングを奨励している場合も多い。しかし、多くの中学生にとって、聞きながら口頭再生するという活動は、認知負荷が高すぎる。そのため、「なかなか上手くできない」という気持ちを抱く生徒もおり、自己効力感(「できる」感)を下げってしまう危険性がある。そこで、このような問題点を緩和する方法の1つとして、リピーティングを使うことをおすすめする。なお、リピーティングでも、シャドーイングと同じような効果が得られるという研究(たとえば、Katayama, 2012)もあるので、時間の都合で両方を行うことができない場合などは、前者だけで終わってしまっても問題はない。大切なのは、与えられた時間内で、内在化や自動化という目的を効率的に達成することであり、活動の種類ではないことに注意。

ポイント ▶ テキストを見ながらのリピーティングで慣れる

最初のうちはリピーティングすら難しい場合がある。そこで、まずは十分にバズ・リーディングを行い、次にテキストを見ながら、聞こえてくる英語をポーズごとに繰り返すという、「視覚情報ありのリピーティング」で慣れていくことをおすすめする。その後、教科書を閉じた状態にして、「通常のリピーティング」活動を繰り返す。この際、一度に再現する英語の長さを少しずつ伸ばしていくように指導するのもよい。このように、多様なリピーティングを繰り返してからシャドーイングへと誘導する流れを作ると、シャドーイングの困難さを緩和することができる。



ここでは、代表的な4つの音読活動について、その目的とポイントを解説します。

竹内 理
(関西大学)



リード&ルックアップ

Read and look up

テキストの英語を、文（あるいは句）単位で黙読（あるいは音読）し、読み終えるたびにテキストから目を上げて、同じ英語を、記憶を頼りに音読再生していく活動。一度に再生する英語の長さや、再生前にテキストを見ながら英語を読む回数（時間）を調整していくことで、英語力の異なる生徒にも対応できる。クラス一斉やペアで行うことも可能。

目的 言語材料の内在化、言語処理の自動化

ポイント 十分に意味を理解し、音声面に習熟してから取り組む

ペアの場合、1回に再生する英語の量を自分たちで調整できるので、自信がない生徒も、能力の高い生徒も、積極的に取り組むことが可能。しかし、この活動にいきなり挑戦させると、負荷の大きさを感じてしまうことが多いので、事前に意味をよく理解させ、バズ・リーディングなどで十分に音声面を習熟させたのちに取り組ませるのがおすすめ。形態的には一斉からペアへ、再生の分量は句レベルから1文、2文へとというように、流れを作って活動をさせると負担感が薄れ、活動をこなせる自信も増す。

ポイント コミュニケーションの基本を確認する

クラス一斉で行う場合は、生徒が音読再生した内容が正しいかどうかを簡単にチェックする方法がないのが難点。ペアで行う場合は、聞き手側の生徒が問題点を指摘して、やり直させることも可能。また、同じくペアの場合には、相手の目を見て再生するようにアドバイスすることで、コミュニケーションの基本（アイコンタクト）を強調することもできる。相手に話を読み聞かせるように感情をこめ、ときにはジェスチャーをつけて音読するように指導するのもよい。



内容再生音読

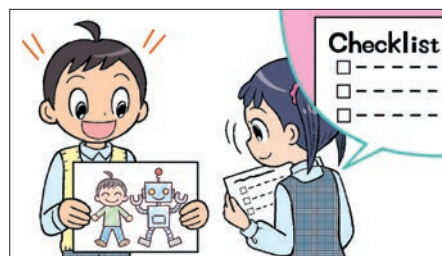
Story reproduction/re-telling

意味理解と十分な音読練習を済ませたテキストを対象にして、口頭でその内容を再生し、聞き手に伝えていく活動。テキストは手もとに置かず、その内容を示す一連の絵や写真を見ながら活動を行う。再生の際には、内在化した文や表現を積極的に活用していくが、必ずしもテキストに現れたそのままの形で利用する必要はない。

目的 コミュニケーション活動への橋渡し (学習した文や語句を自分のものとして活用し、内容を伝えていく経験をする)

ポイント 「伝える」「聞く」を意識させる

この活動は、単純な音読から、コミュニケーションへと橋渡しをしていくための手段の1つとして捉えるとよい。形態としては、ペアで行うことも、クラスで数名を指名して、発表形式で行うことも考えられる。なお、聞き手にとっては再生内容が既知のものとなるため、聞く必然性を作り出す工夫（たとえば、チェックリストを持たせて再生上の重要ポイントを確認させたり、再生内容をより深めるための質問を考えさせたりなど）が重要となる。絵や写真を用意することができない場合は、キーワードとなる単語や語句を黒板に順番にならべて提示しておき、これを使って内容を再生させる方法もある。キーワードを生徒に選ばせることもできる。負荷が高いと判断した場合には、キーワードの数を増やしたり、単語や語句の代わりにキーになる文（本文と同じもの）をいくつかヒントとして提示したりすることも可能。



ポイント 観点をしばって評価を行う

事前に、正確さや流ちょうさなどの観点を、ルーブリック（rubric：評価観点・尺度表）にして生徒に提示しておく、活動のねらいを明確化することができる。なおこの活動の目的から考えると、いたずらに細部にこだわるのではなく、再生された情報量や内容の一貫性の観点から評価を行うことが望ましい。またこの活動のあと、口頭再生した内容を書かせることも考えられる。書く際には、推敲する時間があるため、単なる内容の再生にとどまらず、自分のアイデアやストーリーの展開を1つ付け加えさせるなど（plus one 活動）、ひねりを加えるよう指導してみるのも面白い。